

近未来の小説？

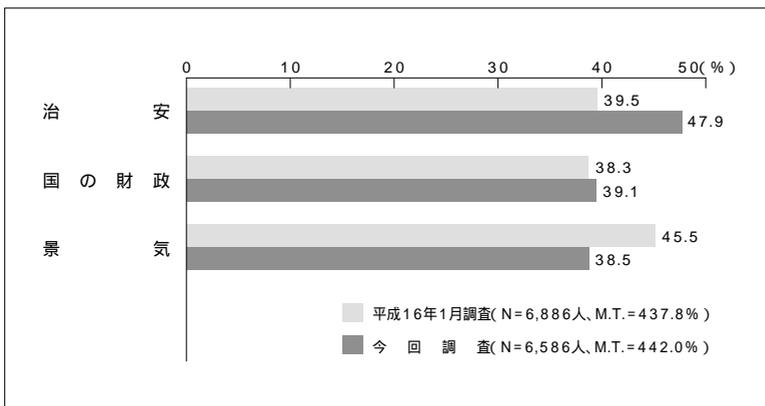
会社員Aさんは体調がすぐれず、その日会社を休んだ。気分転換にと、家の付近を散歩してみようとアパートを後にした。しばらくすると突然、近くの交番から走り出てきた警官がAさんを取り押さえた。「これ以上この道をこの方向に歩いてはいけません。この方向には幼稚園があります。あなたは幼稚園の半径一キロメートル以内には入ってはいけません」となっています。Aさんは、わけがわからず警官に理由を尋ねると、こんな答えが返ってきた。「あなたはインターネットで、これまで幼児ポルノ動画を多数ダウンロードしていますね」。近い将来、このようなことはないと言い切れるだろうか。またこのような社会が、私たちの望む安全・安心なまちの姿なのであるだろうか。

安全・安心と ソーシャル・キャピタル

東 一洋 *Written by Kazuhiro Azuma*

安全・安心への国民的希求

本年二月に発表された「社会意識に関する世論調査」によると、現在の日本の状況で悪い方向に向かっていると思われるのは、「治安」が最も高く、昨年調査時から大きく上昇し、国民体感的な「安全神話の崩壊」を裏付ける結果となっている(図1)。



【図1】 (出典)内閣府大臣官房政府広報室HP
<http://www8.cao.go.jp/survey/h16/h16-shakai/2-2.html>

犯罪の機会 (状況)	犯罪に強い要素
標 的	抵抗性
	犯罪者から加わる力を押し返そうというもの
場 所	領域性
	そもそも犯罪者をターゲットに近づかせないこと
	監視性
	犯罪者の行動をきちんと把握、フォローできること

ハードな要素	ソフトな要素
恒常性	管理意識
不変であること(ドアの鍵が2つ、車のハンドルロックなど)	防犯意識、ドアを開けっ放しにしない
区画性	縄張り意識
きちんと区切られていること(幹線道路から生活道路に入りにくい、移動式障害物)	犯罪者の警戒心を高める住民の縄張り意識
無死角性	当事者意識
死角がない、見通しの利かない場所がない	住民が自分自身の問題として考えていること

【図2】 (出典) G.L.ケリング、C.M.コールズ
『割れ窓理論による犯罪防止』小宮信夫監訳、
文化書房博文社等より筆者作成



もちろんこの背景には、刑法犯認知件数が昭和期の約二倍で、同検挙率は昭和期の約三分の一であるという統計的現実よりも、国外での相次ぐテロや戦争、未成年による幼児をターゲットとした凶悪犯罪、学校への襲撃事件、住宅街での一家惨殺事件などが毎日のように報道され、「明日にでも自分や家族が被害者になってもおかしくないのだ」といった不安感が横臥してのである。一方、週刊誌では、「東京犯罪多発『町丁目』ランキング」といった特集が組まれ、「不安感」を身近に、具体的に感じるようになってくるからである。

このような国民レベルの「不安感」を背景に、第一六二回国会における小泉内閣総理大臣施政方針演説(二〇〇五・一)では、「三五〇〇人の警察官を増員し、『空き交番』の解消に全力を挙げ、『世界一安全な国』の復活を目指します。安全は与えられるものではなく、つくるものであります。新宿歌舞伎町をはじめとする全国の繁華街から、暴力団や外国人犯罪組織を排除し健全な街に再生するため、地域挙げての住民の自主的な取り組みを支援してまいります」と述べられている。平成一六年警察白書の特集テーマは、「地域社会との連帯」であり、特集にあたって、地域の犯罪抑止や防犯活動を進めることは、治安の回復にとどまらず、希薄化した地域社会における連帯の再生にもつながるものである」とされている。一方、多くの都道府県や政令都市等で相次いで『安全・安心まちづくり条例』が制定され、自治体が積極的に「犯

罪に強いまち」を実現しようとする動きが活発化している。

このように、我が国の安全・安心への国民的希求は、「国家警察権力による犯罪検挙」から「自治行政(住民も含む)による犯罪抑制」へすなわち「犯罪者を追う」犯罪原因論から「地域自らが犯罪をおこさせない」犯罪機会論へのシフトを加速させているのである。

犯罪機会論と割れ窓理論の登場

「犯罪機会論」は、犯罪の機会が犯罪者の「標的」と「犯行の場所」によって構成され、「標的」には「抵抗性」要素を、「犯行の場所」には「領域性」と「監視性」要素を強めることにより犯罪を抑制するというものである。

「機会論」が主流となりつつある状況で注目を浴びるようになったのが、「割れ窓理論」(J.O. Wilson & G.L. Kelling 一九八二)である。「割れ窓理論」における「割れた窓」は縄張り意識と当事者意識が低い地域の象徴であり、犯罪者が気軽に犯行に及ぶことのできる地域の象徴である。逆に言えば、縄張り意識と当事者意識の高い地域(すなわち割れた窓が一枚もない地域)は犯罪者にとって「やっかいな」地域、すなわち犯罪の少ない地域というものである。図2のように犯罪機会論の場所に係るソフトな要素が「割れ窓理論」で説明されるわけである。

「割れ窓理論」と

SC(ソーシャル・キャピタル)

賢明な読者の方なら、「割れ窓理論」における「縄張り意識」や「当事者意識」は、我が国が本来有していた地縁や血縁からなる古い地域での「ミニコミュニティ」の特性と表裏一体のものであるという気がしてならない。SC(ソーシャル・キャピタル)論では、「このような地域のSCは内部結束型(Bonding)」であると説明される。しかしR. Putnam(二〇〇〇)は、強力な内部結束型SCに内在する「排他性」の危険性を認めており、「排他性」は、時にカルテルを結成したり、人種差別等の活動を行ったりするグループの出現につながり、ともすれば経済パフォーマンスの悪化、社会参画・社会移動の遮断、コミュニティの対立をまねく要因となる危険性があると指摘している。さらに、「個人の自由を制限する」、「個人の個性を損なう」などのマイナス面が生じ得ることも指摘している。

この典型的な例としてシユリアー二前市長時代のニューヨークを挙げることができよう。彼は増加する街頭犯罪に対し「割れ窓理論」を適用し、街からホームレス、路上屋台、風俗店、マナーの悪いタクシーなど「割れた窓」を一掃した。特に地下鉄の落書き対策は有名で、一度落書きされた地下鉄は車庫入れされ、落書きのない車両のみを運行させることにより、落書き犯人の「モチベーション」を奪い去った。これらの取り組みが功

を奏し、犯罪は半減したにも拘わらず、「ゼロ・ト・ドランス(寛容ゼロ)」、「徹底した管理社会」であるとの大きな批判が渦巻いたのも事実である。

このような負の側面の可能性を大いに有する地域や社会の特性が、犯罪の抑制には逆に効果的であるというところが、犯罪のない社会」を目指していくことの非常に難しい側面を表していると言えよう。

海外での研究

それでは、「内部結束型(Bonding)」ではなく「Bridging(水平的でオープン)」なSCと犯罪抑制はどのような関係にあるのであろうか。

米国のS. Saegart(二〇〇二)は、ビルやアパート内におけるSCを計測し、それが犯罪抑制に役立つかを調べることで、今後のビルやアパート管理に役立てようとした。調査の結果、ビルやアパート内での犯罪抑制に最も関係していたのが「Tenant Associationへの基本的な参加」であった。すなわち、テナント同士の共同活動が活発なビルやアパートほど犯罪が発生しにくいという結果が得られたわけである。

また内閣府(二〇〇二)では、「つきあい・交流」、「信頼」、「社会参加」の三つの構成要素からなるSCが豊かな地域ほど犯罪発生率が低いという調査結果を発表している。

さらに九九年に米国のフロリダ州「ロンバイン」で起った生徒による高校銃乱射事件を機に、

銃社会の危険性に焦点を当てたM.ムーン監督映画作品「Bowling for Columbine」は、隣国のカナダが銃社会であるにも拘わらず、銃による被害者が少なく、国民の多くは自宅に鍵をかける習慣がない、という事実を監督自らが驚きを感じながらも、これが米国の根本的な違いではないかと問題提起している。自宅に鍵をかけないという習慣は極めてオープンなSCが蓄積されていることの象徴である。

このような研究成果や社会認識は「Bonding」ではなく、「Bridging」なソーシャル・キャピタルも犯罪抑制に効くという証左ではないかと思われる。

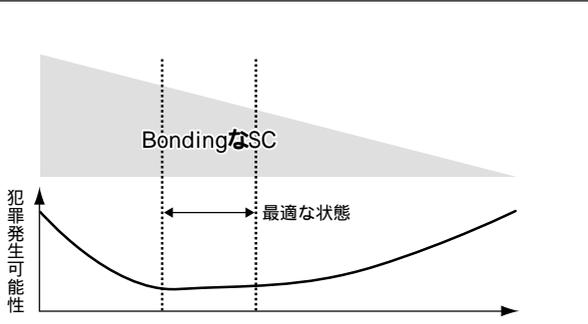
安全・安心とソーシャル・キャピタル

割れ窓理論が重要な要素だと主張する地域のSC(Bonding)と「安全・安心」の逆概念として犯罪発生可能性は次ページ図3のように表される。地域の高い縄張り意識や当事者意識に現れる内部結束型SC(Bonding)が犯罪を抑制するが、過度な状態は逆に「排除」、「差別」による犯罪を増加させる可能性がある。最適な状態というものがあると想定される。

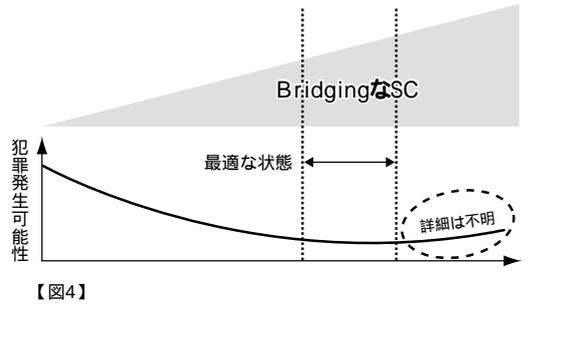
一方、オープンで水平的なSC(Bridging)も犯罪を抑制する効果がある(過度な状態については不明)(次ページ図4)。

地域のSCは「レベル」の質的性格を併せ持っている。少々乱暴ではあるが、SC(Bonding)

を多く蓄積していると思われる地方の農漁林
 村部等では、今後はSC(Bridging)を醸成する
 ことによる犯罪抑制アプローチ(NPOなど外部
 的・知的資源の導入)が効果的なのではない
 か。一方、SC(Bonding)が少ない都市部におい
 てはその表退を止めつつ、またSC(Bridging)
 の促進による犯罪抑制が効果的であると考え
 要するに、地域のSCを踏まえた犯罪抑制
 策の検討が必要であり、「割れ窓理論」への闇
 雲な追従はリスクを伴うという認識が必要だ
 と筆者は考える。



【図3】



【図4】

今後の課題

まちのハードとソフトに関する住民等の自
 発的「取り組み」によるのみその場所の「領域
 性」や「監視性」が高まり、安全・安心なまちづ
 くりが実現するのであれば、それは私たちにと
 って望ましい姿であると思われるが、「警察
 権力」や「行政」が強く関わった場合、冒
 頭のような「超監視社会」になってしまうリス
 クを伴う。過度な国民的不
 安感を得て、その関わ
 りの潤滑油となりがねない。
 安全・安心なまちづくり
 とSCの議論においては、そ
 の地域におけるSCの質の
 議論が極めて重要である
 と思われる。しかしながら我
 が国におけるSCの定量的
 把握は始まったばかり(マク
 ロで包括的)であり、ミクロ
 レベル・質的把握にまで至っ
 ていない。今後SCの計測(質
 的把握を含む)に資する標
 準的なアンケート調査票の
 共有や、組み込む必要のあ

る統計指標のパッケージ化などが示され、それ
 を参考に地域レベルで実査され、さらに計測手
 法に収斂するといった取り組みが必要である
 と考える。

地域のSCの質的特性を踏まえた安全・安
 心なまちづくりが実践されることを望む。

参考文献

- 『平成一六年警察白書』警察庁
- 『過防備都市』五十嵐太郎 中公新書ラクレ 二〇〇四
- 『割れ窓理論による犯罪防止』G・L・ケリング、C・M・トルス 小宮信夫監訳 文化書房博文社 二〇〇四
- 『安心のパシズム』支配されたがる人々 音藤貴男 岩波新書 二〇〇四
- 『リーダーシップ』ルドルフ・シュワマーニ 榎井浩一訳 講談社 二〇〇三
- 『Social Capital and Crime in New York City's Low-Income Housing』S. Saegart, G. Winkel, and C. Swartz, HOUSING POLICY DEBATE Vol.13 (1) pp.189-226. 2002
- 『ソーシャルキャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めよう』内閣府 二〇〇一
- 『NPOによるセミフォーマルな犯罪統制』ホランティヤ・リウ・ミン・イ・ホンズ、小宮信夫 立花書房 二〇〇一

□東一洋(あすま・かずひろ)

株式会社日本総合研究所研究事業本部/PPP/PaP
 リック・プライベート・パートナー)推進室主任研究員。
 一九六一年生まれ。専門分野はPPP。著書は『博物
 館経営論』(共著、樹村房)。